（参考）歳時記

他にもたくさん季節のことばがありますが、主なものをぬき出しておきます。俳句を作るときに役立ててください。

新年（一月）

☆時候・行事

出初	年の初めに消防の初練習をすることをいいます。「出初め式」のことです。

☆遊び・生活

おせち・鏡餅・雑煮	お正月に一家そろっておとそをのみ、お雑煮やおせち料理を食べて新年をお祝いします。おせちの料理には新年にふさわしい意味があります。
初句会・初湯・初夢	新年になって「初めて」することです。
七草がゆ	七種の植物を入れたお粥で七日に食べます。お正月に食べ過ぎたお腹を休めるためのようです。→（若菜）

☆動物・植物

福寿草	葉に先立って鮮やかな黄色の花をつけます。名前もおめでたいですね。
若菜	七種（セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ）をまとめていう言葉です。
シダ・裏白	裏白は、「夫婦共白髪になるまで長生きしよう」という意味をこめて、鏡餅に飾ります。

☆自然

初明かり	元旦の早朝さしてくる太陽の光のことです。

春（二月～四月）

☆時候・行事

春	春そのものや、月名（旧暦名・・如月・二月、弥生・三月、卯月・四月）も季語として使われます。
立春	節分の翌日が立春で、暦の上ではここからが春になります。
早春・春浅し	立春後、二月いっぱいのことをいいます。
春寒し	立春後の寒さのことです。
春めく	春らしくなることです。
彼岸	三月二十日ごろ。一日の昼と夜の長さが同じになる（春分の日）前後三日間をいい、お墓参りに行きます。単に「彼岸」といえば春の季語で、秋は、「秋彼岸」といいます。
日永	春分を過ぎると一日一日に日が長くなります。
花の山・花見・花祭	花といえば、桜をさし、花見に行くのは、春の楽しみの一つですね。最近はそのころの祭りを花祭といいます。京都の平野神社・大分の宇佐神宮中祭が有名です。

うららか・のどか
花冷え
八十八夜

春の日の様子です。気持ちがとてもいいものです。
桜のころの冷え込みをいいます。
立春から八十八日目をいいます。→（茶摘）

☆遊び・生活

初午
お水取り
遠足
耕し・種蒔き
田植え
茶摘み
潮干
草餅

二月初午の日。初午祭が行われます。
三月十三日未明、奈良東大寺二月堂で行われる修二会の中の行事です。おたいまつともいわれます。お水取りが来ると「春が来る」といわれています。
春の行事の楽しみの一つですね。
春先に冬の間に固くなった田畑の土を打ち返し、種をまきます。
昔は、一つ一つ手で植えていました。今は機械化され、ずいぶん楽になりました。
八十八夜から摘み始め、十五日間に摘まれたものを一番茶といいます。
旧暦三月三日ごろの大潮は、干満の差が大きく遠くまで干上がります。潮干は、干潟の意味も潮干狩りの意味もあります。春の貝は、身が大きくお味噌汁の具には最高ですね。
蓬の葉をひきこんだ餅のことです。

☆動物・植物

鶯・初音
鳥帰る・帰る雁
鳥雲に
雉
雲雀
さえずり
若鮎
蓬・土筆・芹・独活・ぜんまい・わらび
夏蜜柑・蕗の薹・木蓮
葱坊主・蒲公英・蓮華

ホーホケキョと鳴き、初めて聞く声を初音といいます。春告鳥ともいいます。
春、渡り鳥が帰ることをいいます。
帰る鳥が雲間に消えて見えなくなることです。
日本にしかいない鳥で、普通は、ケンケンと鳴きます。
春の高空に垂直に舞い上がりさえずります。
春の繁殖期に小鳥がしきりに鳴くことです。
若い鮎。春先、川を上って来るのが小鮎です。
春になって一斉にふく木の芽。新芽を見ると、春を感じずにはいられません。どれも皆、食用です。昔は、子ども連れで取りに出かけました。和物やおひたしにして食べます。
春は、動物では産卵や出産の時期になります。植物では、一年中でもっとも花の多い季節です。野山をはじめ、学校の花壇にも様々な花が咲き乱れますね。まるで、新学期を迎える皆さんを祝福しているかのようです。

☆自然

雪解け	暖かくなると冬の間に雪が解け始めることをいいます。
残雪	春になっても残っている雪のことです。
春の雪	春になってから降る雪のことです。
薄氷	うっすらと張る氷。「うすらい」ともいいます。
流氷	北極海からオホーツク海沿岸などに漂流してくる氷のかたまりです。これに乗って北極の動物がやってくることもあります。
春雨	しとしと降るのが「春雨」で、その他の雨は、「春の雨」といいます。使い分けが難しいですね。
春の日・春の日の光・春の月・春の星・春の海	どことなくおだやかでのどかなようです。
霞	急激な気温の変化で、水蒸気が立ちこめ景色がぼんやり霞んで見える様子です。
陽炎	春の良く晴れた日、地上から水蒸気が立ち、物の形がゆらいで見えることです。
おぼろ	大気が水蒸気を含んでぼんやりと見える様子です。
花曇る	桜の咲くころの曇り空をいいます。
山笑う	草木の芽吹き始めた淡い色合いの春の山の形容。まるで、山が笑っているようにその色合いから見えますね。かわいい表現です。
水温む	春の日差しで温かくなった水のことです。

夏（五月〜七月）

☆時候・行事

夏	夏そのものや、月名（旧暦名・・・皐月・五月、水無月・六月、文月・七月）も季語として使われます。
立夏	五月六日ごろ、暦の上ではここからが夏になります。
初夏・夏めく	夏らしくなってくることを「夏めく」といいます。
夏至	六月二十一、二日ごろ、一年の中で昼の時間が最も長い日。この日を境に、徐々に日は短くなっていきます。
暑し・灼く	気温の高いこと・燃えるような暑さをいいます。
土用	土用の丑に、うなぎを食べると夏ばてしないといいますね。また、土用を過ぎると海の波も高くなってきます。海水浴に行くときは気をつけましょう。
麦秋	麦の刈り入れ時、秋のように麦畑が黄色になるのでこの名前がついたそうです。
秋近し・晩夏・涼し	夏が終わり、秋が間近に感じられます。
祇園祭	七月一日から一か月、京都八坂神社の祇園祭が有名です。京都以外でも、それにならって各地に祇園祭があります。

☆遊び・生活

新茶	新芽を摘んで作ったその年最初のお茶。味わい深くいい香りがします。
筍飯	筍を炊き込んだ飯。いかにも初夏の味わいです。
更衣	春の衣服を夏物にかえます。気分が一新されますね。
袋掛け	りんご・梨・桃の果物を鳥や虫から守るため一つ一つ袋を掛けることをいいます。
梅干	塩付けの梅を真夏の強い日に干します。
夜釣り	夜魚つりをすることです。
鵜飼い	鵜の首に縄をつけ、鵜がつかまえた鮎をはかせて取る漁。長良川の鵜飼いが有名です。
帰省	盆休みなどを利用して、故郷に帰ることです。
避暑	暑さを避け、涼しい所で過ごすことです。

☆動物・植物

閑古鳥	カッコーと鳴く鳥です。昔から「ほととぎす」と混同して呼ばれてきました。閑古鳥とよく似ていますが、鳴き方は「テッペンカケタカ」と聞こえるようです。
時鳥	
青鷺	
鰹・鮎・蟹・山女	山女は、鮎より上流にいる日本特産の渓流魚。
若葉・新緑・新樹	初夏の木々の新しい葉を若葉といいます。
青葉・万葉・みどり	
鷺草・百日紅・蓮の花	白鷺が飛ぶような姿の花をつけるのが鷺草です。
草いきれ	炎天下、夏草のしげりがむせかえることをいいます。

「かんこどり」ともいわれる。

渓流…谷川の流れ。

☆自然・天文

五月晴	梅雨の中休みの晴れ間をいいます。最近では、五月中の晴天のことをさします。
西日・日照り・炎天	西に傾いた太陽を西日といい、太陽が照りつける燃えるような空を炎天といいます。いかにも、夏の暑さを感じます。
青嵐・風薫	青葉のころ、青々とした林や野を吹きわたる風で、青葉が匂うように吹きわたる南風を風薫といいます。
南風	高温多湿の夏の季節風のことです。
朝曇	夏の朝、もやをかけたように曇ることをいいます。
雲の峰	入道雲のこと、青空にぐんぐんと勢い良く伸びる様子は山の峰によく似ていますね。
青田	一面に青々とした田をいいます。
夏の山	高山では雪渓が残り、雲海が見られます。

秋（八月〜十月）

☆時候・行事

秋
立秋
残暑
二百十日
夜長
秋彼岸
朝寒・夜寒・さわやか
秋めく・秋深し・秋の暮れ・行く秋・冷ややか
お盆　（盂蘭盆）
墓参り・灯籠流し
終戦記念日
石取り祭・地蔵盆・盆踊り・秋祭り

秋そのものや、月名（旧暦名…葉月・八月、長月・九月、神無月・十月）も季語として使われます。月の初め頃から秋の気配が感じられることがあります。

（小さな秋を身の回りからさがしてみましょう。）

暦の上で「秋」といわれても、まだまだ暑い日ばかりです。

節分から数えて二百十日目をさします。

冬至までどんどん昼が短く夜が長くなっていきます。

彼岸は年に二回あります。春（春分の日前後）と秋（秋分の日前後）です。俳句では秋の場合は、あえて「秋彼岸」といいます。この日を境にどんどん日が短くなります。

残暑が厳しい時でも、朝夕の涼しさに秋の気配を感じることがあります。さらに、秋本番を迎えると、いろいろ秋を表現する言葉が生まれてきます。

八月十五日あたりを一般に「お盆」と称して会社などもお休みになるところが多いです。主に、仏教の考えから来ている行事です。

灯籠を川に流して死者の霊を送るとされています。

八月十五日（一九四五年のこの日に第二次世界大戦の終結をむかえました。）

（住んでいる地域の行事なども俳句の季語として詠みこむのもいいですね。）

春に行われるところもありますが、秋の代表的な行事です。

☆遊び・生活

案山子
菊人形

刈り入れ前の稲を、雀などから守るために、人を真似て作った脅し用人形。

（最近では、きらきら光るテープや、目玉のお化けみたいな風船や、鉄砲の音が出るしかけのものもあります。）

秋を代表する花の一つに菊があります。その菊をあしらってお人形の衣装を作ります。

☆動物・植物

秋の蝉
蜩・法師蝉
蓑虫
渡り鳥

蝉といえば夏のイメージそのものですが、ヒグラシやツクツクボウシなどが力尽きて地面に落ちている姿を見ることがあります。

雄はミノガになりますが、雌は一生蓑の中で過ごします。

秋になると渡ってくる鳥が渡り鳥です。鳥の名前も季語になります。

秋刀魚
鮭・落ち鮎
秋の七草

文字通り、「秋」には脂ものって美味しくなる「刀」のように光っている「魚」ということで、「さんま」です。鮭の遡上。産卵時期を迎え生まれ故郷の川に戻ってくるのは有名ですね。でも、戻ってこられる鮭はごく一部だそうです。途中幾多の試練を乗り越えられたものだけが子孫を残すことができるのですね。
萩・尾花（すすき）・葛・撫子・女郎花・藤袴・桔梗もしくは朝顔を秋の七草といいます。

☆自然・天文

稲妻
野分
天高し・秋風
秋の海
水澄む
花野
山装う

稲妻は五穀豊穣に欠かせないものです。雷が落ちるのは怖いですが、空気中の窒素を土中に返す大切な役割があるそうです。
野分は秋になると吹く強い風です。
夏の海とはうって変わって人影も少なく、どこか哀愁漂ういいことばですね。
秋の草花の咲き満ちた野原。
秋は紅葉で山が錦に飾られおめかしをしたように見えます。

哀愁…憂い

冬（十一月～十二月）

☆時候・行事

冬
立冬
初冬
芭蕉忌
小春（日）・小春（日和）
冬至
柚子湯
年惜しむ
大晦日・ゆく年・除夜
大掃除
餅つき
年越しそば

冬そのものや、月名（旧暦名…霜月・十一月、師走・十二月）も季語として使われます。
十一月七日・八日ころ、暦の上で冬をさします。十一月は冬というより秋真っ盛りという感じですが、このころから、節分までを冬とします。
俳聖芭蕉翁の命日。「時雨忌」旧暦十月十二日にあたります。
十一月頃でも春のような陽気の日がたまにあります。春の語が使われていますが、冬に春みたいな日のことを表現することばなので冬の季語になります。
一年の中で一番昼の時間が短い日。この日を境に、徐々に日は長くなっていきます。（←夏至）
冬至に柚子を入れた風呂に入ると風邪をひかないといわれています。
一年の最後の日。（普段の月末は単に「晦日」という。）大晦日の夜から新年にかけて突かれる鐘を除夜の鐘といいます。
一年の埃を払って、新しい気分で新年を迎える準備です。
お正月用の飾りと、お雑煮用に餅をつきます。

☆遊び・生活

風邪
空気が乾燥していると、喉の粘膜が乾いて、ばい菌・ウイルスが入りやすくなり、風邪をひきやすくなります。特に、お風呂上がりの油断が禁物です。

湯冷め
体温と気温の差で吐く息が白く見えます。

息白し
日向ぼっこ
座敷を区切る引き戸。「からかみ」ともいいます。

襖
奈良の大仏様のすす払いがよくテレビニュースでながれます。一年の埃を払います。

煤払い
歳の暮れ。この時期、お世話になった人へ贈る物を「お歳暮」といいます。

歳暮
この一年の苦労を忘れてしまおうという目的で開かれる忘年会のことです。

年忘れ

☆動物・植物

鷹・水鳥・鴨
冬の代表的な鳥。水鳥の中には冬に渡ってくる白鳥も含まれます。鴨は、鍋にすると、体も温まり、とてもおいしいです。

海の物
年中いますが、冬が一番美味しい時期を迎えるものです。お鍋や刺身が最高です。
（他にも冬においしい海のものをさがしてみるのもいいですね。）

河豚（鰒）・鮟鱇

牡蠣・鰤

冬の花
冬にも咲く花はあります。寒い中がんばって咲いている姿に心動かされることがあります。

水仙
新年を迎える準備に門松があります。花の少ない時期、花に見立てて門松に添えられる植物キャベツを観賞用に改良したものです。

葉牡丹

冬野菜
冬に旬を迎え、鍋料理や、保存食に欠かせない野菜です。

大根・白菜・ねぎ
ネギは苦手な人もいますが、体を温め、風邪の予防にもなります。麺類に刻みネギがよく合いますね。

☆自然・天文

雪起こし
この風が吹くと雪が舞うとされています。

時雨
降ったりやんだりする冷たい雨。

風花
遠くの地で降り積もった雪を風が運んできて、ひらひら舞う様子です。

氷柱
軒下に雪解け水が凍ってできる氷の柱です。

枯れ野
枯れ木、枯れ草の広がる山野。

山眠る
まるで、山が冬眠でもしているかのように静かな様子をいいます。